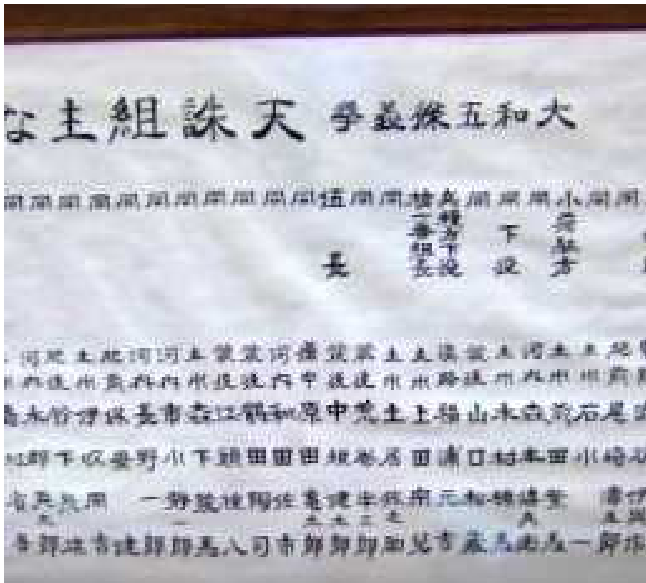


天誅組・原田亀太郎

江澤 香

10月13日、講演会が予定されています。演題は『新島精神の淵源を辿るー新島七五三太と備中松山藩の絆』。講師は、今春3月まで高梁教会牧師をつとめた八木橋康広先生。

八木橋先生は、講演会案内チラシで「若き日本武士・新島七五三太と（中略）天誅組隊士・原田亀太郎との魂の交流に焦点を当て」る旨を述べていますが、天誅組の乱はそれほど有名ではありません。原田亀太郎に至っては全く無名といってもいいでしょう。そこで、『良心の碑』編集長・支倉さんからの要請に応じて、天誅組の乱と原田亀太郎について調べてみました。



天誅組の乱

天誅組は幕末に公卿中山忠光を主将にして志士たちで構成された尊王攘夷派の武装集団です。

文久3年(1863)8月13日、孝明天皇の神武天皇陵参拝(大和行幸)と攘夷親政の詔勅が発せられました。翌14日、土佐脱藩浪士・吉村寅太郎ら攘夷派浪士約40名が大和行幸の先頭となるべく、前侍従長中山忠光を主将に迎えて蹶起しました。かれらは17日夕方、大和五條に到着し、幕府天領五條代官所を襲撃。代官の首を刎ね代官所に火を放ちました。そして桜井寺に本陣を置き、五條を天皇直轄地とする旨を宣言し、五條御政府を名乗りました。これが天誅組の乱です。

8月18日の変と天誅組の壊滅

挙兵直後の8月18日、会津・薩摩を中心とする公武合体派が長州を中心とする尊王攘夷派を京都から追放する政変(8月18日の変)が起きました。この政変により、攘夷親政を目的とした大和行幸は中止になり、挙兵の大義名分を失った天誅組は「暴徒」とされ追討をうける身となりました。

幕府は諸藩に命じて大軍を動員して天誅組討伐を開始。幕府勢の執拗な追撃・搜索を前に天誅組

隊士は捕縛され、京都六角獄へ連行されて処刑されました。

原田亀太郎

原田亀太郎は備中松山城下の商人の子として生まれました。かれは安政元年(1854)江戸に出て松山藩儒官川田甕江に学び、その才幹を認められて松山藩士に取り立てられました。新島七五三太も川田甕江に儒学を学んでいますから、二人はそこで意気投合したと思われます。

原田亀太郎は、文久3年天誅組の乱に参加した後、和歌山藩に自首、京都六角獄で処刑されました。新島七五三太が快風丸で品川沖を出航し箱館に向かうのはその翌年3月です。新島は原田らの蜂起が失敗したことを知った上で、脱国を決意したと考えられます。

新島先生ゆかりのカタルパの花が咲いた

山本寿幸

カタルパに毎日夕方水やりするのが習慣になっています。今年関東地方は雨知らずの梅雨で、いつの間にか真夏日になりましたから、植物にとって大丈夫なのかなと心配していました。

我が家に、徳富蘇峰の出身地熊本県の菱形小学校から譲り受けたカタルパが3本植えてあります。そのうちの1本が待望の開花をしました。

見栄えのしない樹形ですが、大人の掌(てのひら)大の葉っぱの繁みが風にゆれる中、白い花影がチラリ。令和5年5月17日午後3時過ぎのことでした。



待ちに待った”カタルパちゃん“花びらの見えるタテ、ヨコ、ナナメ、物置の屋根に上って真上からも、慣れないスマホでその可憐な姿を撮りまくりました。全く興奮のひとつきでした。

カタルパの苗木を熊本から譲り受けたのが平成26年8月。それから約9年が経過しています。苗木の期間を1年間とみれば、開花まで10年かかったこととなります。

譲り受けた苗木は17本、そのうち14本を神奈川県を中心に他県にも移植しましたが、現在元気に育っているのは10本。待望の開花をしたのは、引き取り手のない「売れ残り組」3本の内の1本です。

カタルパの開花は、5月下旬から6月初め頃といわれています。来シーズン以降、移植した各地から開花の朗報が次々に寄せられることをおおいに期待しているところです。